

# 春の旅立ちを祝して



商学部長  
**木立 真直**  
Manao KIDACHI

この度、卒業証書を授与され、本学を旅立たれることを心よりお慶び申し上げます。紙切れ1枚の卒業証書ですが、皆さんの入学から卒業までの至宝のような思い出の扉ともいえます。教員の目から見たときの大学生生活の一つのパターンとは、次のようなものです(以下、篠原三郎『歌集キャンパスの四季』みずち書房、より)。

「可能性をばしかとひめこつこつと時間を刻む受験生の背」「教室に新一年生みなそろそろ授業開始第一時限」「鷹揚にトランペットの鳴り響くキャンパスに満つ学生の春」「賑々し見たることなき学生も教室にいてテストはじまる」「窓越しに学生の影三、四、七、図書館の灯のあたたかに見ゆ」「疲れたる表情なれどどの顔も厳しかりけり卒論提出日」

大学生の本分は学問を志し修めることにあります。卒論を取り纏める労苦も将来、大きな仕事を任されたとき必ずや出番がやってきます。もっとも、皆さんの進路が一人一人多様であるように、大学生生活も十人十色です。授業やゼミ以外に、サークル、アルバイト、人によっては留学、そして就活や大学院受験など、その組み合わせと内実はまったく異なることでしょう。しかし、そうであるが故に、自分とは異なった人々との多くの出会いがあったはずで、出来うれば、その中に後に一生の友と呼べる人がいたら、これ以上の幸いはありません。

「キャンパスはこころ安らぐ国を超え通うなにかのここにあるらし」

歌集の中で私がもっとも好きな一首です。中央大学の4年間で皆さんにとって、それ自体としてかけがえない青春時代の一コマであり、さらに、山あり谷ありのこれからの人生を乗り越えていく上での糧の一つとなることを心より祈ります。

# 中大生のDNA



理工学部長  
**石井 靖**  
Yasushi ISHII

卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。長い学生生活を終えて、社会に飛び出していこうとしている皆さんに、心からの祝福を送ります。

今年の元旦、全国紙に載った岩波書店の全面広告が目が止まりました。漱石没後百年にあたる今年、「未来に何を残し、今何をすべきか。私たちは漱石の精神を同時代人として学び直すべきではないか」と謳った広告でした。その中に小説「坊っちゃん」の一節が引用されています。『考えて見ると世間の大部分の人は悪くなる事を奨励しているように思う。悪くならなければ社会に成功はしないものと信じているらしい。たまに正直な純粋な人を見ると、坊っちゃん達の小僧だのと難癖をつけて軽蔑する』。東京の学校を出て松山の中学に数学教師として赴任した主人公が上司の言葉にいささか憤慨した時の思いが描かれたくだりですが、昨今の風潮を素朴な口調で糾弾しているようでもあります。小説「坊っちゃん」に描かれた日々をそのまま現代に移し替えるのは少し乱暴ですが、皆さんがこれから社会に出て仕事をしていく中で似たような場面に遭遇することがありそうな気がします。皆さんは(若さゆえの思い上がりかもしれないけれど)大きな自負があり正義感もあり、上司や先輩の言葉に反発することもあるでしょう。一方で「悪くならなければ成功しない」と思うこともあるかもしれません。そう考えることが大人であるような錯覚をもつかもかもしれません。しばしば、中大生は真面目だと言われます。「真面目」とか「愚直」という言葉が、「うまく立ち回る」とか「賢く生きる」ということへの対義語だとすれば、真面目であることを大いに誇りにして下さい。「悪くならなければ成功しない」と思う必要はありません。真面目であることは中大生の誇るべきDNAだと思えます。自身の成すべきことに誠実であれば必ず認められて活躍の場が与えられる、漱石から百年後の日本の社会はそういう成熟した社会だと信じたいと思います。

門出にあたって、卒業生の皆さんが、自身の成すべきことに誠実であり続けること、そしてそれ故に大きな活躍の場が与えられんことを心から願って、お祝いの言葉と致します。卒業、おめでとう。